
もしも、そうであったなら

地球人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも、そうであつたなら

【Nコード】

N8239H

【作者名】

地球人

【あらすじ】

「もしも」そう思うことは誰にでもあるはず。私と先生の「もしも」にはどのような違いがあつたのだろうか。

品の良いお線香がふんわりと鼻をかすめる。この香りは嫌いじゃないけれど、好きとも言えない。なんだか簡単そうできて複雑な感じ。

目の前では目まぐるしく黒服の人間たちが行き交っている。私もその内の一人なのだけれど、何処か他人事のように周りを見ていた。泣いている人、神妙な顔で話をしている人、怒っている人、何処か遠くを見ている人。同じ黒服の人間でも表情は様々だ。一体、私はどんな顔をしているのだろうか。

「肺^{はいがん}癌ですって」

「まあ、そうでしたの」

お香の臭いをまとった中年女性たちがそんな会話をしている。それを小耳に挟みながら、人口密度が高く酸素の薄い部屋を抜け出して、広い中庭に足を踏み入れた。

綺麗に手入れされていた中庭を見るとなんだか不安な気持ちを駆り立てられる気がしたが、今日はそれでも良いだろうと思った。むしろ、そのくらいがちょうど良いのだ。

「そろそろ葬儀を始めますので」

中庭でボーッと立っていると、年老いた男性が私に声をかけてくれた。私は軽く頭を下げて男性の後ろを行く。

そうだ、今日はお葬式。それも私の中で特別な人。私の人生を少なからず変えてしまった先生の。

高校三年生の冬。進路も決まっただいぶ遊び始めてもい頃なのに、

私は毎日塾に通い詰めていた。そもそも、私は指定校推薦で秋の始めには、大学が決まっていたのだ。

部活とかバイトとかには全く手を出そうともせず、私は勉強ばかりの三年間を送った。そんな私にとって、指定校推薦をとるのは至極簡単なことで、特別凄いことでもない。それでも勉強していたかった。

どうしてそんなにつまらない青春を送ったのだった？ 馬鹿言っちゃいけない。私にとったら充実した青春だった。

本当のことを言えば、勉強は言い訳。ただ先生に会いたかっただけ。ただ、それだけなんだ……。

「先生の煙草ふかしている姿、カッコイイですよね」
「それはどうも」

長い綺麗な指で挟む煙草が妙にお気に入りだった。煙草自体は嫌いだけど、先生の仕草が良いんだ。憂いを帯びた表情で煙草をふかしている姿は、私の心をときめかせる。

塾の裏手の自動販売機の前で、私と先生は何を話すわけでもなく、いつも二人だけの時間を過ごしていた。他の先生や生徒は塾の正面にあるコンビニに行くので、私と先生がいる自動販売機を使用する者はいないといっても過言ではない。

「でも、体壊します。止めた方がいい」
「では、コーヒーでも飲んで誤魔化しますよ」

先生の手から煙草を取り上げて勝手に火を消してしまうと、先生

はいつものように缶コーヒーを買う。こんなことを繰り返す三年も続けているのだから、馬鹿な話である。

でも、幸せだった。先生とはこの距離で良かった。けれど、私は若さゆえの過ちと言うのか、欲を出してしまったんだ。

コンクリートの壁に寄りかかる先生の横に、そっと立って私は言った。先生の目を一直線に見つめながら。

「先生、好きです」

「それは……異性としてでしょうか？」

当時、先生は独身ではあったが、すでに四十近かった。まだ成人もしていない青臭いガキの発言など、笑って誤魔化してくれても良かったのに、真面目な先生はそうしなかった。

先生は特に驚く様子も無く、長めの髪の毛を掻き分け、コーヒーの缶を開ける。一口飲んだところで私は口を割った。

「そうです。もう三年も前から好きでした」

特に勇気なんていらなかった。私は思っていたことを口にしただけで、ドキドキしたりすることもなかった。

そう考えると、私は人間として少しズレていたのかもしれない。それとも、その日は特別寒かったから感覚が麻痺していたのか。

「すみません、ただ伝えたかっただけなので気にしないで下さい。返事とかいりません」

口に出したことの重大さは、先生の沈黙の長さが物語っていた。私は慌てて取り繕うように先生にそう言う。

先生はそっと湯気のたつコーヒーを一口飲んだ。私はどうしていいのか分からなくなつて俯き、靴のつま先で小石をコロコロといじ

りだした。

先生は何も言わず、コーヒーの缶を握り締めたまま、綺麗な星空を見上げていた。私はそれをたまに横目で確認しながら、小石を転がし続ける。

「例えば……」

長い時間沈黙を守っていた先生が口を開いたのは、私がいじっている小石を下水溝に落としてしまった瞬間だった。

ぽちゃん、っと小石が水に沈んだことを音でしらせてくれる。

「貴女は“おはよう”と友だちに言っ、その友だちが何も言わなかったら嫌な気持ちになりますよね」

「へ？」

「言葉と言っのは、返事を求めるから相手に伝えるのだと思います。違っでしょうか？」

急に先生から問いかけられて、私は意味も理解しないままに頷いてしまったのを良く覚えてる。

そもそも、その時の私の思考回路では理解するのに、かなりの時間を要した気がするのだけ。

「私、来月結婚するんですよ」

「え？ あ……」

「もしも」

私は無意識に先生に顔を覗かれないように、マフラーに顔をうずめていた。

今思えば、あの時先生はどんな顔でこの言葉を言っていたのだろう。考えたところで分からないか。

「貴女があと十数年早く生まれていたのであれば……」

冷たい風が吹き抜けた。私の心を凍らせていく、冷たい冷たい風。

「私は悩んでしまったかも知れない」

先生の眠るお棺を覗き込んだ時、不謹慎にも私は少し笑ってしまった。周りは泣いていると言うのに、私は、はにかんでしまつてバツが悪かつたのは否めない。

うつかり眠つてしまつた時の先生の顔と何一つ変わらなかつたから、もしかして起きるんじゃないかと思つて。でも、先生はそういう悪い冗談をしたりする人じゃないもんね。

……煙草はあれほど止めるつて言つたじゃない。体悪くするからつて。でも、安らかそうで良かったよ。苦しそうな顔は見たくないから。

そつとお棺が閉められる。私は先生にそつと言つた。お墓の前では言いたくなかつたから。まだ形のある先生に言いたかつたのよ。ねえ、先生。それくらいワガママはいいでしょう？

「先生、私来月結婚します」

何かが肩に触れたような気がして、私は振り返つた。視線の先には黒服の老人たちが涙を流しているばかりだったけど、私には“何か”がいるような気がしてならなかつた。

そつと自分の肩に手を置いて、目を閉じる。ここで終わりにしよう
と心の中で呟き、そつと目を開く。

「貴方があと十数年遅く生まれていたのであれば……」

運ばれるお棺を見ながら私は頭を下げて、そつと黒服の人間たちの
間を縫って歩いた。

品の良いお線香がふんわりと鼻をかすめる。このにおいは嫌いじ
やないけれど、好きとも言えない。

でも、長かった冬が終わりを告げている香りだと思った。これで
やつと春が来る、そんな感じ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8239h/>

もしも、そうであったなら

2010年10月13日15時54分発行